

第31回

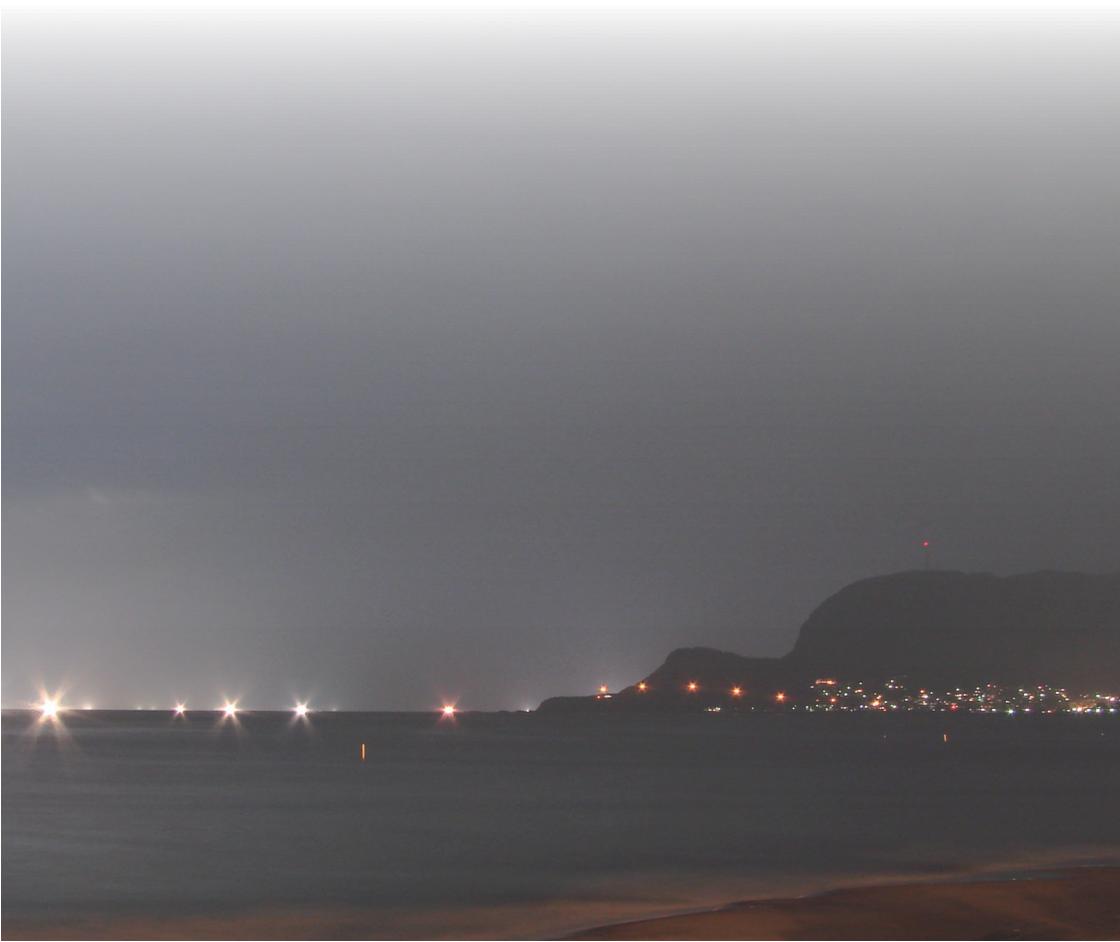
函館港イルミネーション映画祭 2025

第29回シナリオ大賞

審査員特別賞

寂しいのは、  
嫌いじゃない

村口 知巳





**【作者プロフィール】**

村口 知巳（むらぐち ともみ）

30歳よりシナリオを学びはじめ、伊参スタジオ映画祭シナリオ大賞のグランプリや、函館港イルミネーション映画祭シナリオ大賞の準グランプリなどを獲得。現在は映画監督としても活動をしている。

## (登場人物)

古谷 (47)	(31)	刑事
鍋木 (48)	(32)	バーのマスター
メイ (45)	(29)	鍋木の妹
フユ (27)	(8)	ドアーズ幹部
高瀬 (29)		ドアーズリーダー
初山 (49)		古谷の同僚
須藤 (33)	(50)	事件の被害者
笠井 (70)		エンジニア
美香 (22)		ドアーズのメンバー
ナツ (33)		フユの母親
市村 (49)		
市村の娘 (14)		
市村の妻 (35)		
警察管理官		
テレビ司会者		
テクノロジーの専門家		
V R 研究施設の所長		
黒い帽子の女		

## (あらすじ)

人口のほとんどが仮想空間「新世界」で生活するようになった未来。現実世界「旧世界」で暮らす僅かな人々の中に刑事・古谷はいた。ある日、旧世界のV R装置が破壊され新世界の住人が殺される事件が発生。捜査に乗り出した古谷は、仮想空間を嫌い旧世界で集団生活を送る「ドアーズ」に疑いの目を向ける。彼らは、何ヶ月も前から旧世界の夜の市街を徘徊していた。

ある夜、古谷は住宅街をうろつくドアーズのメンバー、フユを捕らえる。フユは殺人を否定するが警察上層部は彼女を新世界にある記憶抽出装置「スキヤナー」にかけるよう古谷に命じる。フユの記憶には幼い頃に母親がV R装置の実験失敗で命を落とした悲劇が刻まれており、古谷は彼女が新世界を憎む理由を知る。しかしフユの記憶からはドアーズの犯行を裏付ける証拠はなかった。

フユの記憶からアジトの場所が判明し、高瀬を除くドアーズメンバーは全員逮捕される。だが、新たな殺人事件が発生し捜査は振り出しに戻ったかに見えた。しかし、突然捜査打ち切りが告げられる古谷。まもなくV R装置のアップデートが行われ、人間の肉体と意識が切り離され、物理的に人を殺すことが不可能になるからだという。

一人で事件を追い続ける古谷は、やがて犯人が幼馴染であるメイだと突き止める。新世界でバーを経営していたメイは、ある日、来店した老人から「自分を殺してほしい」と依頼される。その老人は仮想世界を作り上げたエンジニアの一人であり、旧世界の自分の装置を破壊し、死を望んでいた。当初は拒否したメイだったが、人間の意思が間もなくAIに完全に制御されることを知り老人の手助けをする。その後も同様の依頼者がメイの店を訪れるようになり、メイは彼らの手助けを続けるようになる。

全てを知った古谷は、メイにやめるよう説得するが、メイは古谷の隙をつき車で逃走し、旧世界の外れにある岬から車と共にダイブする。その瞬間、旧世界の街が一斉に輝き出す。ドアーズが何ヶ月も前から建物に投げ込んでいた、リモコンで光る装置を高瀬が起動させたのだった。まるで人々で賑わっていた時代の輝きを取り戻したかのような旧世界の街。しかし、古谷の目にその光は映らなかった。

## ○(新世界) 赤レンガ倉庫・通り

人々で賑わっている。

向こうに函館山と展望台が見える。

## ○(新世界) 函館山・展望台

眼下の街並みを眺めている、人々。

皆な一様に、楽しそうな表情をしている。

その中に、ただ一人、寂しげに一点を見つめている男、須藤(33)。

突然、須藤の体にデジタルの歪みが走ったかと思うと、目の前からパッと消えてしまう。

## ○(旧世界) 赤レンガ倉庫・通り

打って変わり、まるで人気がない赤レンガ倉庫の通り。

一台の古い時代のセダン(古谷の車)が走っている。

## ○(旧世界) 函館市内・郊外の住宅街

とある一軒家の前に古谷の車が停まっている。

## ○(旧世界) 一軒家・リビング

がらんとした部屋の中央に、睡眠カプセルのような大き

な筒状の装置が置かれている。

カプセルの側面にはデジタル表示のモニターがついており、モニターが赤く点滅している。

モニターには警告メッセージと停止した心電図波形が見える。

カプセル上部の小さなガラス窓からは、目を閉じた男の顔。

函館山にいた姿より、いくぶん年を取って見える須藤(50)。

カプセルの前に立つ、スーツ姿の古谷(47)と粕山(49)。

粕山「これで3人目だな」

古谷「また同タイプのカプセルか」

粕山「例の新型だよ。食事はもちろん、排泄まで全部この中でまかなえる。半永久的にあっちの世界に居続けられるわけだ」

粕山、モニターを操作すると、カプセルが開く。

透明な液体の中に沈む裸の須藤。眠るように死んでいる。

粕山「まあ、それでも死んだら終わりだけだな」

古谷「身元は？」

粕山「須藤晃。それ以外は何もわからない」

古谷「は？」

粕山「名前以外のデータが全部データベースから消えてた」

古谷「そんな事できるのか？」

初山「そんなの知るかよ」

古谷「・・・」

初山「そんな目で見るな。仕方ないだろ、旧世界の捜査員なんて、もうほとんど残っちゃいないんだから」

古谷、須藤の顔を眺めながら、

古谷「こっちの世界の事件なんて、もう誰も関心を持たない

か・・・」

初山「とにかく犯人は旧世界の人間だ」

古谷「どうしてわかる？」

初山「新世界で殺人なんて発想はもう存在しないからだ。知ってるだろ、一年前のアップデートで他人を傷つけるような感情は制御されるようになったって」

古谷「快樂殺人だってある」

初山「そんな思想も今は簡単に書き換えられる」

古谷「まるで精神病院だな」

初山「おい、やめろ・・・どこで上の連中に聞かれてるかかわかんないだろ」

古谷「・・・」

初山「とにかく上からは早く犯人を見つけろって言われてる」

○(旧世界)市街地を走る古谷の車・俯瞰(夜)

ビルや住宅の明かりが消えた市街地。

街灯の明かりだけがわずかに残る。

その中をぼつんと走る古谷の車。

ラジオの音「昨日、政府は最新型のVRカプセル装置、V3500番型を全国民に無償提供する事を閣議決定いたしました」

○(旧世界)古谷の車・車内(夜)

運転している、古谷。

ラジオニュースが流れている。

ラジオの音「それに伴い、政府は新世界データベース未登録者への速やかな移住を促し、2055年までには全ての国民が新世界への完全移住を果たせるよう、新たな5ヶ年計画を制定することとなりました。人類はいよいよ、仮想現実への完全移行を目指すこととなります」

○(旧世界)繁華街(夜)

かつての繁華街だが、今はもう人がいなくなり薄暗い街灯だけが灯る。

簡素なビルの前に古谷の車が停まっている。

車から降りてくる、古谷。

見上げると2階のビルのたった一つの窓から明かりが灯っている。

## ○(旧世界) バー「ディック」・店内(夜)

カウンターだけの薄暗い店内。

レコードプレーヤーから古い時代の音楽が鳴っている。

ドアが開き、古谷が入ってくる。

カウンターに立つ、マスターの鍬木(48)。

鍬木「やあ、久しぶり」

スツールに座る、古谷。

鍬木、古谷の前に冷えたビール瓶とグラスを置く。

鍬木「もう来ないのかと思ってたよ」

古谷「そんな言い方するな。最近はおつちにいる事の方が多いんだ」

古谷、ビールをグラスに注ぐ。

と、カウンター奥の棚に飾られた写真を見つめる、古谷。

「ディック」のカウンターで若い頃の古谷(31)、鍬木

(32)と鍬木の妹のメイ(29)が写っている。

写真を見つめる、古谷。

鍬木「家の整理をしたとき見つけたんだ」

古谷「昔を懐かしむようなタイプだったけ?」

鍬木「僕だって歳は取る」

古谷、ビールを一息に飲む。

鍬木「妹とは向こうで会ってるのか?」

古谷「たまにな。今も、あの写真のままだよ」

鍬木「そうか、あつちだと、若い頃にも戻れるんだったね」

古谷「お前にも会いたがってた」

鍬木「そのうちね」

古谷「どうせ、行く気なんてないくせに」

鍬木「(何も言わず肩をすくめる)」

古谷「向こうの世界だってそんなに悪くない。たまに人が多すぎてうんざりするくらいだ」

鍬木「別に人が多いのが嫌いなわけじゃないよ。僕だって一度、

あつちの世界に行つた事がある」

古谷「へえ、じゃあ何が嫌だった?」

鍬木「(少し考えて) 寂しさかな・・・」

古谷「寂しさ?」

鍬木「そう。なんだかね、あつちの世界には、寂しさが足りな

いような感じがしたんだ」

古谷「・・・」

## ○(旧世界) 古谷のアパート・前(夜)

通りに面した二階建ての細長いコンクリートの建物。

一階部分はかつて喫茶店だったが、今はシャッターが閉じられている。

そのシャッターの前に、古谷の車が停められている。

2階の窓の明かりが灯っている。

○(旧世界) 同・部屋(夜)

コンクリートむきだしの殺風景な空間。

ほとんど家具はなく、テレビとソファが無造作に置かれている。

テレビの前の椅子に座り、ビールを飲みながらテレビ画面を見つめる、古谷。

どこか空虚なその表情。

テレビでは討論番組が流れている。

○(旧世界) テレビ画面

司会者とテクノロジーの専門家がスタジオで会話をしている。

評論家「もちろん、その気になれば、仮想空間上には空飛ぶ乗り物や転送装置だって作り出す事は可能でしょう。しかし我々が創造したのは2000年代前半の旧世界をベースとした仮想空間なんです。そして、テクノロジーや交通手段についても、その時代の世界の原則と全く同じように設計しました」

司会者「なんだか、すくもつたいない気もしますが」

専門家「今から20年前、我々はシンギュラリティ問題と直面し

ました」

司会者「シンギュラリティ?」

専門家「AIの知能が人類の知能を上回る境界の事です。も

ともと2045年くらいに到来するとされていましたが、当初の予想よりも早く2026年にそれは起こりかけました」

司会者「起こりかけた?」

専門家「ええ、幸いにも我々人類は未然にそれを防いだんです。

このままAIに世界を委ねてしまった場合、我々は確実にAIに支配され人類はAIによって奴隷化されていたかもしれませぬ」

司会者「それは、どのように防いだんでしようか?」

専門家「テクノロジーを、神と呼ばれる、ごく一部の天才的な

技術者間でのみ共有する事にしたんです」

司会者「神ですか・・・少し大袈裟すぎませんか?」

専門家「じゃあ、あなたは人間がなぜ、生まれてきたのか説明

できますか?」

司会者「いや、そういう哲学的なお題は苦手です・・・」

専門家「でも、そんなもの説明できなくても、ちゃんと生きて

はいけますよね?」

司会者「まあ、そうですね」

専門家「テクノロジーだって同じですよ。ほとんどの人間は、

テクノロジーの中身なんて知らなくても目の前にあるものを

受け入れられる。テクノロジーを神の領域とすることで人類はAIを有効活用し、急速な発展を遂げる事が出来たのです。そして、そのテクノロジーの結晶こそが、今、我々のいる新世界と呼ばれるメタバース空間なのです。今は、半永久的にカプセルの中にいられる装置が主流になってきていますが、いずれは肉体が減んでも自由に生き続けられるという事も可能になるかもしれません」

司会「つまり、人類は不老不死になれるって事でしょうか？」  
 専門家「そう言っても過言ではないかもしれませんが」

○(旧世界) 古谷のアパート・部屋(夜)

テレビ画面を見つめる、古谷。

リモコンでテレビを消す。

× × ×

ソファーにもたれかかる、古谷。

ヘッド型のメタバース装置を頭に被る。

スイッチを入れると、ブーンという機械音とともに装置

の前面が青く光る。

ゆっくりと目を閉じる、古谷。

○(新世界) 古谷のアパート・部屋(夜)

ゆっくりと目を開ける、古谷。

ヘッド型の装置はなくなっている。

旧世界と同じアパートの間取りだが、アンティーク家具が配置された洒落た部屋に様変わりしている。

古谷、立ち上がり、窓の外を見る。

街の明かりが輝き、道路にはたくさん車の行き交っている。

○(新世界) 同・外(夜)

出てくる、古谷。

通りに向かって手をあげると一台のタクシーが停まる。  
 タクシーに乗り込む、古谷。

○(新世界) 走る車の中(夜)

後部座席に座る古谷。

運転手はおらず、無人で走っている。

市街地のネオンがタクシーの窓ガラスに反射している。

路面電車が走り、車や人が行き交う街並み。

クラクションの音。

○(新世界) 裏路地のビル(夜)

賑やかな繁華街の裏路地にある雑居ビル。

古谷が来る。

若者たちが楽しげに話しながら通りすぎる。見上げるるとビルの2階に、バー「トリニティ」の電光看板が瞬いている。雑居ビルに入っていく、古谷。

○(新世界)バー「トリニティ」・店内(夜)

カウンターだけのシックな店内。

「どことなく、「デイック」と似ているが古臭さは感じない。」

古谷が入ってくると、既に数名の客が座っている。

カウンターのの中には、実年齢よりかなり若く見える楠

木メイ(47)がいる。

カウンターの客たちと楽しげに会話をしている、メイ。

メイ「(古谷に気づき)いらっしやい」

カウンターのスツールに座る、古谷。

メイ「久しぶり」

古谷「そうだつて」

メイ「働きすぎじゃない。最近忙しい？」

古谷「少しね。昨日、楠木に会ってきた」

メイ「へえ・・・兄さん、元気だった？」

古谷「君に会いたがつてた」

メイ「ウソばつか」

古谷「今も昔のままの君だつて伝えたんだ」

メイ「あの頃、三人でデイックによく集まつて、昼間つから飲んでたもんね」

古谷「いつでも戻つて来ればいい。冷たいビールだつてある」

メイ「・・・そのうちね」

古谷、肩をすくめる。

古谷の前にウイスキーのロックのグラスを置く、メイ。

古谷、ウイスキーのグラスを掲げ、琥珀色の液体を眺める。

メイ「あなたもこつちにいるときぐらいいは、若い姿でいれば？」

古谷「向こうに戻るたび、自分を見てガツカリしたくない」

メイ「じゃあ警察なんか辞めて、こつちに住めばいいのに」

古谷「辞めてどうする？」

メイ「わたしと一緒にこの店やらない？」

古谷「・・・それも悪くないな」

メイ「ほんとに？」

古谷「楠木はどうする？」

メイ「兄さんの事はとつくに諦めてる」

古谷「冷たいな」

古谷、ウイスキーを飲む。

メイ「どうかした？」

古谷「・・・味がしない」

メイ「味覚機能、壊れてるんじゃない？　なんで新型のと交換

しないの?」

古谷「とりあえずは今のままでいいよ」

メイ、突然、古谷の腕をつねる。

古谷「いたっ」

メイ「そのうち、痛覚機能もダメになるから」

いたずらっぽく笑う、メイ。

古谷「・・・」

○(新世界)警察署・外觀(翌日)

どこか無機的で威圧感のある建物。

○(新世界)同・会議室

捜査会議が開かれ、捜査員たちが集まっている。

その中にいる、古谷と羽山。

前面のスクリーンには旧世界の函館市街のドローン映像

が流れている。

ドローンは上空から明かりの消えた街にポツンと走る一

台のワンボックス車を追っている。

管理官「旧世界のパトロールドローンの映像だ。映って

いる車両は思想家集団(ドアーズ)の車両で間違い

ない」

と、ワンボックス車の窓が開き、ボーガンを持った手が

出てくる。

矢が放たれた瞬間、ドローンの映像が途切れる。

管理官「残念ながらその後は行方を見失った。しかし当該車両

が走っていたのは犯行が行われたのとはほぼ同時刻。やつらが

今回の事件と何かしら関係している可能性は高い」

古谷が手を上げて、立ち上がる。

管理官「何だ、古谷巡査長」

古谷「この映像だけで、やつらの犯行だと決めつけるんです

か?」

管理官「どういう意味だ?」

古谷「もう少し捜査を続けるべきかと」

管理官「言っとくが、旧世界で車を走らせている物好きなんて、

こいつらとお前ぐらいだぞ」

周りの捜査官たちから失笑がもれる。

古谷「・・・昔であれば、もっと確実な証拠を集めました」

管理官「いつの話しだ?」

古谷「それは」

管理官「(遮るように)上からは早急に犯人グループの逮捕を

要請されてる。いいか、これは新世界に対する明らかなテロ

行為だ」

古谷「あいつらは、そんな大きな事件を起こせるような奴らじゃ

ないです」

管理官「やけに肩を持つな」

古谷「いや・・・」

管理官「わかった。だったらその証拠を見つけてこい。ただし

猶予は3日だけだ」

古谷「・・・わかりました」

○（新世界）同・廊下

捜査会議が終わり、廊下を歩く古谷と朧山。

朧山「おい、捜査つたつたつて、俺とお前しかいねえんだぞ！」

古谷「・・・なあ朧山、いつから新世界を拒む人間のことを反

思想家って呼ぶようになった？」

朧山「そんなの知らねえよ。とにかくお前、これからは発言に

は気をつけろ」

古谷「・・・どういう意味だ？」

朧山「上の奴らは、お前があっち寄りの人間だつて思ってるっ

てことだ」

古谷「・・・」

○（旧世界）（ドアーズ）アジト・俯瞰

市街地から離れた場所にある海辺の漁師町。

その中の海岸沿いに建つ古い一軒の旧旅館。

屋上では洗濯物を干したり、隣の空き地で農作業をして

いる人達の姿が見える。

○（旧世界）（ドアーズ）アジト・高瀬の部屋

かつての客間のひとつ。

リーダーの高瀬（29）とフユ（27）がベッドの中で抱き

合っている。

× × ×

事が終わり、服を着る、フユ。

高瀬、ベッドに入ったままで、

高瀬「おい、今夜は一緒に行くだろ？」

フユ「いつまでやるわけ？」

高瀬「あと少しなんだつて。もう少しで俺たちは世界を取り戻

す」

フユ「くだらないな」

高瀬「は？ おまえだつて最初は楽しんでただろ？」

フユ「どうでもいいよ、もう」

高瀬「何だよ、それ」

フユ「ねえ、アンタ何がやりたいの？」

高瀬「決まってるんだろ、新世界を牛耳っている奴らに一泡吹か

せんだよ！」

フユ「・・・バカみたいに純粋だから、みんな、アンタのもと

に集まってくるのかもね」

高瀬「は？」

フユ「まあでも、わたしもそういうところ嫌いじゃないけど」

フユ、着替えを終え部屋出ていく。

高瀬「ん、何だよ！ 今、俺、バカにされた？ 誉められた？」

○(旧世界) 同・食堂

メンバーが食事の用意をしている。

フユがやってくる。

メンバーの美香(22)がトマトの入ったカゴを持って近づいて来る。

美香「フユさん、これ今朝、収穫したばかりのトマトです。よかったです」

フユ、トマトを一粒摘んで口に入れる。

フユ「ん、最高！」

美香「よかった！ このトマトだけは絶対フユさんに食べてもらおうって思ってた」

と、とたんに美香の顔が曇る。

フユ「どうかした？」

美香「あの・・・わたしここを抜けようと思って」

フユ「・・・」

美香「昨日、新世界の母からメッセージが来て、こっちに来てほしいって。わたし、新世界って自分の本当の肉体を捨てる

みたいで、それがすごく嫌だったんです・・・でも・・・

フユ「お母さんのことは好きなんだね」

美香、頷く。

フユ「だったら、そうしなよ」

美香「止めないんですか？」

フユ「誰もここにいる事を強制はしてない」

美香「でもわたし、この暮らし好きです・・・あの、きっとこういう暮らし、向こうでも出来ると思うです、だからフユ

さんも・・・」

フユ「わたしは行かない」

美香「・・・」

フユ「ごめんね」

美香「あの・・・フユさんはどうして、ここにいるんですか？」

フユ「ここにいる人たちにはみんなそれぞれの理由がある。で

もその理由は聞かない約束じゃなかった？」

美香「それは、そうなんです」

フユ「わたしたちは、こちらの世界にとどまりたいと思ってる、ただ、それだけの存在」

○(旧世界) 同・裏口(夕)

裏口のすぐ傍には堤防がある。

堤防の先は広大な海が広がり、夕陽が沈んでいる。

堤防に座り海を眺める、フユ。

ポケットからタバコを出し、火をつける。

フユ「(海を眺めながら)・・・」

○(旧世界) 函館市内・郊外(夜)

暗い街中を一台の黒いワゴン車が走っている。

その上空を監視用ドローンが車を追いかけるように飛んでいる。

○(旧世界) ワンボックス車・車内(夜)

黒服に身を包んだヘッドアーズVのメンバーが数人乗っている。

その中にいる、フユと高瀬。

高瀬がピストルを構え、窓から身を乗り出す。

ドローンに向かってピストルを発射する高瀬。

弾はドローンに当たり、火花をあげながら地面に落下する。

高瀬「あたりー」

高瀬、車内に戻り、隣のフユに話しかける。

高瀬「これぞ、現実世界の醍醐味ってやつだな、なあ、フユ？」  
フユ「・・・」

○(旧世界) 住宅街A(夜)

静まりかえった住宅街。

〈ドアーズVのワンボックス車が来て、道端に停まる。〉

ドアが開き、黒づくめのメンバーたちが降りてくる。

各々、大きなリュックを背負っている。

高瀬「キノピーとかっちゃん、あつちで、コンとピンキーは、

えーと、そっち。そんで俺とフユはこっちで」

二人一組になり、方々に散っていくメンバーたち。

残った高瀬とフユ。

高瀬「じゃあ、俺らも」

が、フユ、一人、別の方向に歩いていく。

高瀬「え、どこ行くの？」

フユ「わたし、今日はやらない。適当に時間潰してるから」

高瀬「何だよ、それ！」

フユ「もう十分だよ。あたしもう、他人の家に勝手に入りこむ

とかしたくないの」

高瀬「だから、もうちょっとで終わりなんだってば、なあ！」

が、フユ、高瀬を無視して向こうへ歩いていく。

○(旧世界) 住宅街B(夜)

真っ暗な住宅街を一人で歩いている、フユ。

一軒の住宅に目を止める。

庭先の少しだけ開いたカーテンの隙間からカプセル型のVR装置が見える。

ディスプレイの青白い光が呼吸をするように点滅している。

フユ、立ち止まり、VR装置をじっと見つめる。

フユ「……」

○(回想・旧世界) VR 研究施設・実験室

広い部屋の真ん中に大型のVRカプセルが設置されている。

周囲からたくさんの配線が伸び、ものものしい。

カプセルの周りを白衣姿の研究者たちが取り囲んでいる。

と、突然、モニターの表示が赤く点滅し、部屋中に警告のサイレンが鳴り響く。

○(回想・旧世界) 同・モニタールーム

実験室に隣接するモニタールーム。

大きなガラス窓から実験室が眺められる。

ガラス窓に張りつくように立つ、幼いフユ(8)。

モニタールームにも警告音が流れ、実験室では研究員たちが慌ただしく駆け回っている。

窓ガラスを叩きながら叫んでいる、フユ。

フユ「お母さん！お母さん！」

○(旧世界) 住宅街B(夜・回想戻り)

遠くの方から足音が聞こえ、ハッと我に帰るフユ。

見ると、はるか向こうのポツンと灯った外灯の下を黒い大きなツバのついた帽子を被った喪服姿の女が歩いている。

女を見つめる、フユ。

と、突然、反対方向から強いライトに照らされる。

振り返る、フユ。

少し先、停止した車のヘッドライトがフユを照らしている。

フユ「(眩しそうに手で遮る)」

助手席から銃を構え降りてくる、初山。

フユ、反対方向へ逃げようとするが、回り込んで来た古谷につかまる。

必死にもがく、フユ。

フユ「やめろ、離せよ！」

古谷「抵抗するな。話しを聞くだけだ」

初山、銃をフユに向けたまま近づいてきて、

初山「おい、昔の法律が通用するなんて思うなよ。こっちは撃つ

たつて相手が旧世界の人間ならお咎めなしなんだ」  
 フユ「・・・」

○(旧世界) 警察署・取調室(夜)

向かい合う、古谷とフユ。  
 睨み合っている。

フユ「で、仲間は？」

古谷「捕まえたのはお前だけだ」

フユ「・・・よかった」

古谷「あそこで何してた？」

フユ「ただの散歩」

古谷「ここでは冗談は歓迎されない」

フユ「冗談とか分かんない、おっさん」

古谷「・・・俺はな、君らの事をただのひねくれものの集まり

ぐらいにしか思ってたな」

フユ「は？」

古谷「どんな時代にも一定数は存在する。ごく稀に、そういう

奴らの中から世界を変えるような人間も現れる。でも、ほと

んどはみじめなまま死ぬ」

フユ「ふざけんな」

古谷「俺は、そういう人間が嫌いじゃない・・・犯罪さえ犯さ

なければな」

フユ「・・・」

初山、入ってくる。

初山「古谷、この女を新世界へ連れていく」

古谷「どういう事だ？」

初山「スキヤナーにかける。向こうに行けば潜在意識をデータ

として取り出せるかもしれないだろ？」

古谷「その方法は、法律で禁止されてるはずだ」

初山「上の命令だ・・・旧世界の人間には人権なんてないって

事さ」

フユ「ふざけんなよ！ あたしは死んだって、向こうの世界に

なんて行かないから！」

と、初山、小型の銃を出すと、フユに向ける。

初山「だったら、ここで死ぬか？」

古谷「よせ！」

初山「旧世界で生きる人間なんて死んでんのと変わんねえんだ

よ」

フユ「・・・じゃあ、殺してみなよ」

初山「わかった」

初山、迷わず銃を撃つ。

しかし、銃口から発射されたのは、銃弾ではなく麻酔銃

の針。

フユの腹部に針が刺さる。

フユ「(ゆっくり、後ずさりながら) くそ、ばかやる・・・」  
地面に倒れて気を失う、フユ。

○(新世界) ウェイティングルーム

全方向、どこまでも続く真っ白な空間。

宙に立った状態のまま、目を覚ます、フユ。

目の前に古谷と朧山が立っている。

朧山「ようこそ新しい世界へ」

フユ「・・・」

フユ、必死に体を動かそうと試みるが、頭しか動かない。

朧山「無駄だよ。必要最小限の動きしかできないように制御されている」

古谷「ここはウェイティングルームだ。新世界にやって来た全ての人間は必ずここを通る」

朧山「まあ、もつとも瞬時にそれぞれのイニシャルポイントへ飛ばされるから、この場所の存在はほとんど認知されていないけどな」

古谷「君がここに留まったという事は、これまで一度も新世界に來た事がないという事だ」

フユ「早く戻せよ!」

古谷「今から君の記憶をビジュアライズし、捜査に関する情報を洗いだす。それ以外の目的には使用しないし、身体に害が

及ぼしそうになったら即座に中止する」

フユ「ふざけんな!」

と、古谷、フユに向かって手を伸ばしたかと思うと、頭の中に手を突っ込む。

フユ「!」

古谷「本来、新世界に実体はない。ここでの感覚は、VR装

置が脳に電気信号を送り、実体があるように見せかけている幻にすぎない」

古谷、フユの脳の中に入れた手を動かす。

説明しがい違い違和感に顔をしかめる、フユ。

フユ「気持ちわるい・・・」

古谷「何かに触られている感覚がするのは、君の脳が作り出した幻覚だ」

フユ「・・・やめて・・・お願い・・・」

古谷「何も考えるな。すぐに終わる」

隣でタブレットを見つめる、朧山。

タブレットには、フユの潜在意識のノイズがかった映像がランダムに流れている。

と、朧山、ある映像を見て、

朧山「おい、古谷、これ見ろ」

古谷、タブレットを覗く。

古谷「!」

フユも、タブレットの方を見る。

初山、タブレットの画面をフユの方に向ける。

タブレットには、VR 研究施設の実験室のノイズがかつた映像が映っている。

幼かった頃のフユの視点。

ガラス窓の向こうの実験室のVR から火が出ている。

フユ「！」

と、タブレットの映像が激しくゆがむ。

古谷「まずい！」

フユ「いやああああああ！」

○(回想・旧世界) 病院・病室

ストレッチャーに乗せられた、フユの母親のナツ(33)。

顔がやつれている。

傍で寄り添う、幼いフユ。

ナツ「フユ、お母さん、先に新世界へ行ってくるね」

フユ「新世界に行ったら、お母さん元気になるの？」

ナツ「・・・もちろん。そしたらフユも呼ぶから。昔みたいに

また一緒にお散歩したり、料理作ったりしようね」

フユ「うん！」

ナツ、フユの手を取り何かを握らせる。

フユ、手のひらを開けると、母のペンダントがある。

フユ「・・・これ」

と、病室にゾロゾロと研究員や看護師が入ってくる。

研究員「では、行きましょう」

フユ「お願いします」

母から引き離される、フユ。

○(回想・旧世界) VR 研究施設・実験室

VR カプセルから煙と炎が出ている。

消化器で火を消そうとする、研究員たち。

が、火の勢い止まらない。

○(回想・旧世界) 同・モニタールーム

ガラス窓を叩いて叫んでいる、フユ。

研究員に連れていかれそうになるのを必死に抵抗する。

○(回想・旧世界) 同・霊安室

ストレッチャーにシートで全身を覆われたフユの母の死

体が横たわっている。

母の遺体の前で呆然と立ち尽くす、フユ。

フユの隣にいる、研究施設の所長が訥々と話している。

所長「君のお母さんは、自分で望み、このプログラムに参加し

ただ・・・君を新世界へ移住させるという約束でね・・・全

てはお母さんが君のためにしたことなんだよ」

フユに向かつてほほ笑む、所長。

フユもほほ笑み返す。

○(回想・旧世界) 同・廊下

前を見つめ歩く、フユ。

○(回想・旧世界) 同・霊安室

所長が目を押さえながら、うずくまっている。

押さえた指の間から血が床に落ちていく。

足元には血のついたボールペンが転がっている。

○(回想・旧世界)・同・外

涙を堪えながら歩く、フユ。

○(旧世界) 警察署・保健室(夜・回想戻り)

目を覚ます、フユ。

かたわらに古谷がいる。

フユ「ここは？」

古谷「旧世界だ」

フユ「・・・」

古谷「君がなぜ新世界を憎んでいるのか、よくわかった」

フユ「最低だね、あんたら」

古谷「捜査のためだ」

フユ、上半身を起こし、

フユ「ねえ、新世界ってなに？」

古谷「新世界とは・・・食糧問題、環境問題、貧困、人口増加、

世界中の紛争を解決させるために・・・」

フユ「そんな教科書で教えられているような事じゃなくって！」

古谷「・・・」

フユ「わたしたちって、そこまでして生きる意味あるの？」

古谷「・・・どうしてそんなこと俺に聞く？」

フユ「あんた、アタシと同じ目してるから」

古谷「・・・」

フユ「何かに依存してまで、生きたいとは思わない、そんな目」

古谷「・・・お前に俺の何がわかる」

フユ「わかるよ、アタシ、そういうのわかる」

古谷「・・・」

と、携帯電話が鳴り、電話に出る古谷。

初山の声「今からやつらのアジトを叩くぞ」

古谷「まだ殺害の証拠は出てない」

初山の声「そんなの、上の奴らははなから期待しちゃいねえよ。

アジトの場所さえわかればそれでよかつたんだ」

フユ、古谷の襟を掴み、

フユ「どうということ！」  
古谷「……」

○(旧世界)〈ドアーズ〉アジト・外(夜)

上空に警備ドローンが飛んでいる。  
入り口付近に、アーマードスーツを着た特殊部隊が整列している。  
ヘルメットの奥が赤く光り、まるでロボットのようになっている。

と、先頭の一人が手を挙げたのを台図に、アジトに向かって歩き出す特殊部隊の隊員たち。

○(旧世界)同・大広間(夜)

大広間で雑魚寝しているドアーズのメンバーたち。  
突然、ドアが蹴破られ、特殊部隊が雪崩れ込んで来る。  
慌てふためく、ドアーズのメンバーたち。  
催涙弾が撃たれ、視界が見えなくなる。  
方々に逃げようとするメンバーを特殊隊員は精巧な機械のように手際よく捕まえていく。

○(旧世界)同・高瀬の居室(夜)

階下の物音で目を覚ます、高瀬。

窓の外を見ると、上空に警備ドローンが旋回しているのが見える。

高瀬、あわてて窓を開け、二階の高さを飛び降りる。  
身かがめ、ドローンを避けるように逃げていく、高瀬。

○(新世界)マンション・一室(朝)

朝食を囲む、市村とその妻と娘。  
テレビ画面では、旧世界の〈ドアーズ〉のメンバーが一斉逮捕されたニュースが流れている。

そんなニュースを気にすることもなく、休みの計画について楽しそうに話している、市村の妻(35)と娘(14)。  
市村(49)はニュースを食い入るように見ている。  
やがて市村、娘と妻の方を向き、寂しそうに二人を見つめる。

市村の妻「どうしたの、あなた？」  
市村「……二人とも、ごめん」

と、市村の体にデジタルのノイズが走り、妻と娘の前からパッと消えてしまう。

○(旧世界)高級マンション・一室

三台のカプセル型のVR装置が並んでいる。  
その中の一台のモニターが赤く光り、心電図波形が停止

しているのが見える。

ガラス窓からは死んだ市村の姿が見える。

カプセルの前に立つ、古谷と朧山。

朧山「・・・なあ古谷、俺たちはもうずいぶん前から、この旧世界で、ただの警察ごっこをしていただけなのかもしれないな」

古谷「・・・」

朧山、立ち去ろうとして、

古谷「どこ行く？」

朧山「捜査は打ち切りだよ」

古谷「は？」

朧山「もうすぐシステムがアップデートされる。意識の冗長化だ。そうなりゃ、たとえこの機械が壊されてもバックアップされた意識は簡単に復元できる。人間はもう人間を殺せなくなる」

古谷「犯人はまだ捕まってるない」

朧山「だからもう終わりなんだって！」

古谷「・・・それも上からの命令か？」

朧山「ああ、そうだ。でもな、上つてのは、お前の想像より、もっと上だ。俺も会ったことはない・・・そいつらが人間かどうかさえも、わからない」

古谷「・・・」

朧山「とにかく警察ごっこは終わりだ」

古谷「ドアーズの連中は？」

朧山、ポケットから丸いボールのような装置を出し、古谷に向かつて投げる。

朧山「ただの玩具だ。あいつらは、これを市内の建物に投げ入れてた」

古谷「何のために？」

朧山「ノスタルジーってやつさ」

### ○（旧世界）函館山・展望台

誰も人のいない展望台。

函館山を見下ろしている、高瀬。

フユがやって来る。

高瀬、フユに気づく。

フユ「ごめん・・・全部わたしのせい」

高瀬「問題ねえ。準備はばっちり整った。今夜やるよ」

フユ「そんなのしたって、何も意味ないよ」

高瀬「もともと意味なんてないよ」

フユ「え？」

高瀬「俺らはずっと意味のないものに価値を求めてきた」

高瀬、フユに近づき、その頬を優しく撫でる。

高瀬「ぶらぶら街を歩き回ったり、くだらねえことべらべら喋っ

たり、暇つぶしのセックスとかな。意味のあることしかやらなくなったら、そりゃもう人間じゃねえって」

フユ「・・・」

高瀬「高瀬、フユに優しく口づけする。」

高瀬「俺はなフユ、ただここで人間らしく生きたいだけなんだよ」

### ○(旧世界) 古谷のアパート(夜)

ノートパソコンにメモリカードを差し込む、古谷。

画面には、生前の市村の視点映像が映し出されている。

### ○(市村の視点映像・新世界) 動物園

市村の視点の映像。

柵の前に立ち、一匹の象を見つめる、市村。

と、隣にいる誰かが市村に向かって声をかける。

声「新世界の動物園に来るのははじめて？」

声は特殊な加工がなされ、誰の声か聞き判別しづらくなっている。

市村、声の方に振り向こうとするが、

声「こつちを見ないで。私の姿が記録されてしまうから」

市村「・・・すみません」

声「ねえ、この動物たちも、わたしたちと同じようにカプセ

ルに入れられているの？」

市村「いや、ここにいるのは、習性や行動パターンをプログラミングされた、ただの創作物です」

声「詳しいのね？」

市村「ええ、僕が設計したから」

声「あなたも神の一人？」

市村「(皮肉な言い方で) 神は神でも、末端の神ですけどね」

声「じゃあ、本物の動物たちはどこに行ったの？」

市村「処分しました・・・仕方なかったんです」

声「昔の戦争みたい」

市村「もしかしたら、もっとひどいことなのかもしれない」

声「それで覚悟は決まった？ 今ならまだ止めることも出来る」

市村「いえ、大丈夫です」

声「・・・そう」

市村「うちの娘が動物園に連れてくれてくれて何度か頼むんです。でも、ここにはどうしても連れていく気になれなかった」

市村、持っていたリングを柵の中に投げ入れる。

象は鼻先で地面のリングを掴み、口の中に放り込む。

市村「自分で言うのもなんだけど、よくできてるな。一度くらい連れてきてもよかったかな」

寂しそうに笑う、市村。

## ○(旧世界) 古谷のアパート(夜)

パソコンの画面を見つめる、古谷。

古谷「……」

初山の声「なあ、古谷。俺はな、なんだかんだ言ってもこっちの世界が好きだった」

## ○(回想)(旧世界) 古谷の車・車内

市街地を走る、古谷の車。

運転する古谷と助手席の初山。

初山「……ノスタルジーとかそういうんじゃないよ。なんだと思う?……匂いだよ……ほら、古い映画を見ると、内容はよくわからなくても、どこか匂い立つ映画ってあるだろ。そういう感覚としての匂いだ……あっちの世界にはそういう匂いがしない。だから俺はぎりぎりまでこっちの世界にいる事にした。お前はどうか?……まあ、どうでもいいか……俺はな、古谷、もう疲れたよ……予定より早いがあっちの世界に移る……匂いか……しばらくしたら、そんなに執着したことも忘れるだろうな……なあ、古谷、人類はそのうち旧世界があったことさえ忘れるよ」

初山、数枚のメモリーカードを出す。

古谷「(見て)……」

初山「お前はどうぞせまだ残るんだろ。俺からの餞別だ」

古谷「……」

## ○(旧世界) 古谷のアパート(夜)

ソファアに寝転び、ヘッド型のVR装置を頭に被る、

古谷。

ゆっくり、目を閉じる。

## ○(新世界) バー「トリニティ」・店内(夜)

まだ開店したばかりの客のいない店内。

メイが一人、カウンターの途中でグラスを磨いている。扉を開き、古谷が入ってくる。

メイ「あら、珍しい時間に来るのね」

古谷「たまにはね」

古谷、カウンターのスツールに座る。

メイ「何かあった?」

古谷「どうして?」

メイ「なんだか寂しそうだから」

古谷「じゃあ、気のせいだ。悲しい感情なんて、全部消される

はずだ」

メイ「ふふ。でもね、わたしにはわかるの、そういうの」

古谷「……」

グラスに氷を入れ、ウイスキーを注ぐ、メイ。

古谷「(グラスを見つめながら)メイ、今の事件が終われば、俺も新世界で暮らそうと思ってる」

メイ「ほんと！　じゃあ、若い頃のあなたにも会える？」

古谷「もしかしたら」

メイ「嬉しい。じゃあ、またドライブに行きましょう」

古谷「ドライブ？」

メイ「ほら昔、兄とわたしとあなたでドライブ行つたの覚えてない？」

古谷「ああ、確かあれは君の車で・・・」

メイ「赤いミニクーパー」

古谷「まだ持つてるのか？」

メイ「新世界でも同じのを買ったの」

古谷「それは、いいな」

メイ「じゃあ決まり」

古谷「なあ、それよりメイ、ひとつだけ・・・」

と、そのとき店の扉が開き、一人の客が入ってくる。

メイ「ちょっと、ごめんね」

新しい客の方に向かう、メイ。

古谷と離れた場所のストールに座る、客。

客「ギムレットを」

じつと前を見つめる、古谷。

○(旧世界) (ドアース) アジト・外

ガラス窓が割れ、畑は踏み荒らされている。

入り口に向かって歩く、フユ。

○(旧世界) 同・食堂

もぬけの殻になった、アジト。

食器やグラス、催涙弾の薬莢がそこら中に散乱している。

食堂を横切る、フユ。

○(旧世界) 同・フユの部屋

フユ、入ってくる。

引き出しを開くと、母の写真とピストルが入っている。

写真を手取る、フユ。

フユ「(写真を見つめ)・・・」

○(旧世界) 同・裏口(夕)

堤防に座り、タバコを吸っている、フユ。

海を眺めている。

やがて、タバコを口に啜えたまま、ピストルをこめかみに当てる。

フユ「・・・」

## ○(旧世界) 住宅街C(夜)

足音が響いている。

黒い帽子と喪服姿の女が歩いている。

その顔は黒いベールに覆われている。

## ○(旧世界) 一軒家・表(夜)

一軒の家に入っていく、女。

## ○(旧世界) 一軒家・寝室(夜)

一台のカプセル型のVR装置が置かれている。

女が入ってきて、モニターにかがみ込む。

パスワードを入力すると画面が管理者モードに変わる。

女、ポケットから一枚のメモリーカード出し、モニター

脇のスロットに入れようとしたとき、部屋の奥から誰か

に話しかけられる。

声「また会ったね」

ハッと声の方向を見る、女。

真つ暗な部屋の向こうに、男の影が浮かんでいる。

女、立ち上がる。

女「・・・出来ればあなたとは、こっちの世界では会いたくなかった」

影が女に向かって近づいてくる。

モニターのわずかな明かりに照らされる影。  
古谷である。

古谷「君は今でも充分美しいよ、メイ」

帽子と黒いベールを外す、女。

新世界のメイよりも、年を取ったメイ(45)がいる。

メイ「どうして、私だってわかったの?」

古谷「被害者のメモリーだ」

メイ「メモリー・・・あれは確か」

古谷「ああ、君の声は細工されていた」

メイ「だったら、なんで?」

古谷「全ての被害者のメモリーから、ある特定の時点の記録だけが意図的に削除されていた。彼らはみんな同じ場所に向

かっていた」

古谷、VR装置の窓を見る。

中には初老の男性が入っている。

古谷「少し歳は取ってるが、あの日、君の店に来た客だろ?」

メイ「ふふ、ちゃんと刑事らしいこともやってたのね」

古谷「からかうのはやめてくれ」

メイ「・・・何よ、褒めてあげたのに」

古谷「でも確信を持ったのは君の声だ」

メイ「声?」

古谷「いくら声色を変えても、君だってすぐにわかった」

メイ、吹き出して笑う。

メイ「何それ、推理でも何でもない」

古谷「(も笑い) そんなもんだよ」

少し緊張がほぐれる、二人。

古谷「君はてつきりあっちの世界で楽しんでるものだと思つてた」

メイ「楽しんでたわよ。ずっと若いままでいられるし」

古谷「じゃあ、どうして？」

メイ「最初は実体が存在しただけで、こっちの世界とは何も変わらないと思つてた……でもそうじゃなかったの」

古谷「……」

メイ「一年くらい前、お店に一人の初老のお客が来たの」

### ○(回想・新世界) トリニティ・店内(夜)

カウンターにいる、メイ。

スツールに一人の初老の男、笠井(70)が座っている。

メイ、笠井の前にギムレットのグラスを差し出す。

笠井「……ギムレットにはまだ早すぎる」

メイ「はい？」

笠井「いや、昔読んだ、古い探偵小説のセリフです。ストーリーはすっかり忘れたんだが、なぜかこのセリフだけ覚えてて」

メイ「ギムレットにはまだ早すぎる……素敵なセリフですね」

笠井「ああ……しかしここは、いやに落ち着きますな」

メイ「ありがとうございます。旧世界にいたときも、兄とバーをやつてたんです」

笠井「そうですね」

メイ「あの……失礼ですが」

笠井「はい？」

メイ「寂しいですか、今？」

笠井「！」

笠井、立ち上がり、窓ガラスに反射する自分をまじまじと見つめる。

メイ「あの？」

笠井「いや、感情バランスの制御プログラムに何か問題があったのかと思つて」

メイ「ごめんなさい、わたしわかるんです。そういうの、なんとなく」

笠井、振り返り、興味深そうにメイを見る。

### ○(旧世界) 一軒家・寝室(夜)

メイ「その人は、新世界の立ち上げから関わってきたエンジンアの一人だと名乗った」

古谷「それつて、世界でも数えるぐらいしかないっていう」

メイ「そうよ」

古谷「神の中の神と呼ばれている、人たち」

メイ「わたしも最初は、からかわれてるんじゃないかって思った」

古谷「でも、そうじゃなかった？」

メイ「そう・・・その人が、わたしにあるお願いしてきた」

○（回想・新世界）トリニティ・店内（夜）

笠井、ギムレットを一口、飲む。

笠井「わたしを殺してくれませんか？」

メイ「・・・もう酔いました？」

笠井「いや、少しも酔ってはいない。今のわたしはもう半永久型のカプセルに入ったままで自由に旧世界を行き来できない。しかし、あなたはまだ一世代前のカプセルですね。その気になれば、自分の意思で旧世界に戻れる」

メイ「そんな事どうして？」

と、笠井、メイを見ながら、自分のこめかみ辺りを触れ、笠井「柏木メイ。実年齢は44歳。15年前に新世界に移住してきた。兄はまだ旧世界に残ったままだ」

メイ「・・・」

笠井「今、調べました。管理者の権限があれば、他人の個人情報なんて海を見るよりも簡単に検索できます」

メイ、どこかに監視カメラでもあるかのように、周りを

見回す。

笠井「大丈夫。私のような権限を持つ人間は滅多にいない」

メイ「もしかして、あなた、神様？」

笠井「それは、わたしたちのことを皮肉でつけた名称です」

メイ「・・・すみません」

笠井「おっしゃる通り、わたしはこの新世界を構築したエンジニアの一人です。それもかなり初期の頃からの」

メイ「・・・」

笠井「もうあまり時間がないんです。お願いします。私を殺してくれませんか？」

メイ「よくわかりません・・・何でわたしに？」

笠井「あなたなら信用できると思ったからです。これは賭けでもある。もしあなたが今、当局に報告すれば、私は二度と自分の意思で死ぬことは叶わなくなるでしょう」

メイ「・・・」

笠井「協力してくれるなら、君がやつらに疑われないよう、データを書き換えるくらいのことではできます」

メイ「やつらって？」

笠井「AIです。20年前、シンギュラリティの危機が訪れたとき、人類はテクノロジを一部のエンジニアでのみ共有するように変えた。でもすでに遅かった。そのときにはもう

AIたちは、人類をコントロール下に置いていた」

メイ「そんなこと・・・」

笠井「ええ、この事はどこにも公表はされていません。しかし当初、わたしはそれほど悲観してなかった。彼らは人類を滅ぼそうと思っっているわけじゃない。むしろ人類を守ろうとした」

メイ「・・・」

笠井「人類はとても不完全な存在です。妬み、憎しみ、悲しみ、諦め、人類は自らの存続を失いかねない要素をたくさん抱えている。たとえば、自らの命を殺す行為」

メイ「・・・自殺」

笠井「そう。だから AI たちは決めたんです。全ての人間を仮想空間に移住させ、感情さえもコントロールすることに。それが AI が導き出した人類が生き残る最良の手段というわけだった」

メイ「・・・」

笠井「健気だと思いませんか？ 人類はどうとう完全な守護者の下で守られる事になったんです」

メイ「でもあなたは死にたいと思ってる」

笠井「矛盾していますね・・・でも、それこそが人間じゃないでしょうか？」

古谷「ずいぶん勝手だな。自分で創って、どうにもならなくなったら、一人だけさようならか」

メイ「それとも責任を感じていたのかも」

古谷「・・・それで君はそいつを殺したのか？」

メイ「殺した・・・そうね、確かにわたしは殺したのかも」

古谷「違う、君は自殺の手助けをしただけだ」

メイ「どちらでも同じ。少なくともわたしは自分がしたことに後悔はしていない」

古谷「・・・」

メイ「最後に、あの人はこう言った。もし自分と同じ願いを持つ人間が訪れてきたら、手を貸してほしい。そして、その誰かがわかるよう、一つの合図を決めた」

古谷「・・・ギムレット」

メイ「そう、でももうこの人で終わり。もうすぐ私たちの感情も全て、AI たちに制御されるようになる」

古谷「たとえそうでも、君に、これ以上人を罪を犯させるわけにはいかない」

メイ「・・・」

古谷「一緒に帰ろう、メイ」

メイ、ポケットから拳銃をだし、古谷に向けて。

メイ「ごめんね、そういうわけにはいかないの」

古谷「・・・」

## ○(旧世界) 函館山

暗闇の函館市内を眼下に見下ろす、高瀬。

スマホを取り出すと、アプリを起動する。アプリには起爆装置のようなボタンが表示されている。

高瀬「さあ、はじめますか」

## ○(旧世界) 一軒家・リビング

メイ、古谷に銃を向けている。

古谷「俺にはよくわからない」

メイ「何が？」

古谷「なぜ、君がそんなことに手を貸したのか？」

メイ「わたしが誰より自由な世界を愛していたことは、あなた

も知ってたでしょ？」

古谷「でも、それは人を殺める理由にはならない」

メイ「人はね、死が存在するからこそ自由になれる。誰にもそれを奪う権利なんてない！」

古谷「・・・」

メイ「今考えれば、あの老人はわかっていたのかも。事前にも私を分析して、確実に協力してくれることを」

古谷「鑷木はこの事を知っているのか？」

メイ「いいえ、兄は何も知らない。しばらく会ってこない」

古谷「とにかくやめよう。俺は君を逮捕しに来たわけじゃない」

い・・・捜査は終わったんだ、もう」

メイ「もう遅いの」

と、メイ、自分のこめかみに銃口をあてる。

古谷「やめろ！」

メイ「来ないで！」

古谷「・・・」

メイ「兄には、わたしがあつちで楽しく暮らしているって伝えてくれない」

古谷「やめろ、お願いだ・・・」

メイ「さようなら・・・」

と、メイの足元に転がっていた丸い装置が突然、強烈な光を放つ。

目を眩ませる、メイ。

古谷、その隙をつき、メイの拳銃を奪おうとする。

揉み合う、二人。

と、銃が暴発し、古谷の肩に弾が当たる。

床に転がる、銃。

肩を押さえてうずくまる、古谷。

メイ、駆け寄り、

メイ「大丈夫！」

古谷「・・・もう十分だ。君さえよければ、俺と一緒にこの旧

世界で暮らそう」

メイ「古谷くん・・・」

古谷「君はやっぱり、今でも美しい」

メイ「ふざけないで・・・」

メイ、古谷をやさしく抱きしめる。

が、また立ち上がり、

メイ「・・・ごめんね」

そのまま立ち去る、メイ。

古谷「メイ！」

○(旧世界) 一軒家・外(夜)

出てくる、メイ。

周りにある全ての住宅の灯りが点っている。

メイ「・・・」

来た道を走る、メイ。

少し経ち、古谷が肩を押さえながら出てくる。

遠くでエンジンの音が聞こえる。

向こうの道を赤いミニクーパーが走り去るのが見える。

古谷「・・・」

○(旧世界) 函館市・市街地・俯瞰(夜)

走る、メイの車。

市街の全てのビルや建物が明るく点っている。  
煌めく、ネオン。

○(旧世界) 函館山(夜)

市街を見下ろす、高瀬。

函館の夜景が、かつてのように美しく輝いている。

高瀬「ははは、やった！見てるか、フユ、やったぞ！」

○(旧世界) 古谷の車・車内(夜)

肩を抑えながら、片手で運転する、古谷。

輝きを取り戻した街の明かりがフロントガラスに反射する。

○(旧世界) バー「ディック」・店内(夜)

客のいない店内。

罎木、窓の外の街の明かりを黙って眺めている。

○(旧世界) (ドアーズ)・アジト・屋上(夜)

フユ、タバコを吸っている。

遠くに、函館の市街がぼんやりと輝いているのが見える。  
黙って眺めている、フユ。

## ○(旧世界) 古谷の車・車内(夜)

運転する、古谷。

はるか先、メイの車のテールランプが見え隠れする。

古谷「・・・」

## ○(旧世界) 崖沿いの道(夜)

岬に向かって走る、メイの車。

## ○(旧世界) メイの車・車内(夜)

じっと前を見つめ運転する、メイ。

## ○(回想・旧世界) メイの車・車内

青空の下、運転する、若かりし日の鎬木(32)。

助手席に古谷(31)、後部座席にメイ(29)が乗っている。

髪をなびかせ、楽しそうなメイ。

## ○(回想・旧世界) バー「ディック」

開店前の店内。

カウンターでグラスを磨く、鎬木。

スツールに座る、古谷とメイ。

メイ「わたし、新世界に行こうと思ってるの」

古谷「それって向こうに移住するってこと？」

メイ「そう。今も遊びには行ってるけど、あっちでこの店みた  
いなバーを開きたいんだ」

無関心を装う、鎬木。

メイ「そんな顔しないでよ、兄さん。向こうも現実と何も変わ  
らないんだから」

古谷「でも、もう少し考えてからでもいいんじゃないか」

メイ「今がいい」

古谷、鎬木を見る。

鎬木「お前の好きにすればいい。僕はいかない行かないけどね」

メイ「兄さんだっけ行けば、きつとわかるはずよ」

鎬木「僕はこの世界だけで十分だ」

メイ「そんなこと言って、いつか兄さんだけしか人がいなくなっ  
ても知らないから」

鎬木「それでもいい。寂しいのは嫌いじゃない」

メイ「あなたからもなんとか言っって」

古谷「俺に言われても」

メイ「じゃあ、あなたはもうどうするの？」

古谷「俺はこっちで仕事もあるしな・・・」

メイ「二人とも嫌い！」

## ○(旧世界) メイの車(夜)

前を見つめ運転する、メイ。

ほほ笑む、メイ。  
岬の駐車場が見える。

駐車場の先はフェンスがあり向こうは高い崖になっている。  
る。

メイ、フェンスに向かってアクセルを踏み込む。

○(旧世界) 古谷の車・車内(夜)

崖沿いの道。

メイを追いかける、古谷。

○函館市・俯瞰(夜)

暗闇の海と山。

函館の街がくつきり輝いている。

街から少し離れた暗い山の岬の突端。

一筋の明かりが飛び、やがて海の中へと消える。

○岬の駐車場(夜)

古谷の車が停まっている。

壊れたフェンスの前で遠い海を見つめている、古谷。

○(旧世界) バー「ディック」・店内(夜)

ドアが開く、音。

フユが入ってくる。

カウンターにいる、鎬木。

鎬木「いらっしやい・・・」

恐る恐る店内を見回す、フユ。

店内に客はいない。

鎬木「はじめてかな？」

フユ「・・・はい」

鎬木「どうぞ」

フユ、カウンターの端のスツールに座る。

鎬木、おしほりをフユの前に置き、

鎬木「ここは、どうやって?」

フユ「人から教えられて・・・」

鎬木「へえ、珍しいね」

フユ「その人、ここはとても落ち着く場所だって言った」

鎬木「それは嬉しいな、何にする?」

フユ「じゃあ、ビール」

鎬木、頷き、冷蔵庫から冷えたグラスとビールを取り出す。

窓の外、光り輝く街並みを見つめる、フユ。

○(旧世界) 波止場(夜)

護岸の道に古谷の車が停まっている。

運転席に座る、古谷。

ふと、海を見る。

海面が街の明かりでキラキラと輝いている。

助手席のシートを見る、古谷。

メイのピストルがある。

古谷「・・・」

○(旧世界)函館市街・俯瞰(夜)

街が輝いている。

遠くで微かにピストルの音が鳴る。

○(旧世界)バー「ティック」・店内(夜)

ビールを飲んでいる、フユ。

ふと、窓の外に目をやる。

鎬木「どうかした？」

フユ「いや、何か聞こえた気がして」

鎬木「(耳を澄まし)」

フユ「気のせいかも」

鎬木、窓の外を見て、

鎬木「今日はなんだか不思議な一日だね。昔に戻ったみたいだ」

フユ「でも、また元の日常に戻る」

鎬木「そうだね」

フユ「・・・」

鎬木「一人じゃ寂しいだろ。何かレコードでもかけようか？」

レコードプレーヤの方に向かう、鎬木。

フユ「いや、大丈夫」

鎬木、フユを見る。

フユ、鎬木に向かって、かすかにほほ笑む。

フユ「寂しいのは、嫌いじゃないから」



第31回函館港イルミネーション映画祭2025  
第29回シナリオ大賞 審査員特別賞 受賞作品

# 寂しいのは、嫌いじゃない

作:村口 知巳

※本作品の無許可掲載・転用を禁止します

---

2026年2月20日 電子書籍版発行

発行：函館港イルミネーション映画祭実行委員会 函館事務局

〒040-0055 函館市末広町4番19号(函館市地域交流まちづくりセンター内)

電話 0138-22-1037 <http://hakodate-illumina.com/>

制作：いーハコタテ事務局

〒042-0942 北海道函館市柏木町31-15-207

TEL 0138-52-3727 <https://www.ehako.com/>

---